

坂東正沙子写真展「月讀」

作家名：坂東 正沙子

会場：gallery 176 (ギャラリー イナロク)

大阪府豊中市服部元町1-6-1 / 阪急宝塚線 服部天神駅(梅田から11分)下車 徒歩1分

会期：2019年6月7日(金)～6月18日(火)

休廊日：6月10日(月)～13日(木) *通常と休廊日が異なります

開廊時間：13:00～20:00 *通常と開廊時間が異なります

企画：gallery 176 坂東正沙子



© Masako Bando

作品説明：

死を考えると、生きるとは死に向かうこと

タイトル「月讀」は夜を統べるものとして月を神格化した日本神話の神です。

私にとって夜は精神と親和するものであり、自身と向き合う大切な時間となります。

また、夜は闇を生む時間でもあります。その闇は不明瞭で捉えられず、恐怖をもって私たちを包むため夜は死のイメージと結びつきます。そして昼=生、夜=死として一日の周期と同じように生物もまた生まれては死ぬことを繰り返すと考えます。

死ぬことは次の新しい生命誕生の準備です。しかしそれがいつ訪れるのか、知ることはできません。そのため、常にそれが身近に存在していると認識し受け入れておかななくてははいけません。

怖ろしく、避けたいものとして存在する死に対して前向きに考え、どう迎えるかを再認識するための写真群です。

自身の死と同様、大切な存在の死も耐え難いものです。

だからこそ想像し、考え、その時が来るのを準備して迎える必要があります。

死生観を反映した写真のイメージを通じて観る者が死を感じ、死について考えることで「今」という生の実感や尊さを思い起こすきっかけを生む作品です。

展示構成：

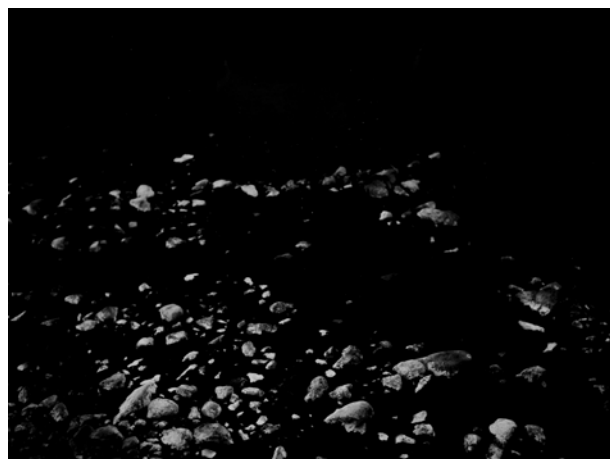
ゼラチンシルバープリント10～15枚程度+空間インスタレーション

作品は額装したものを展示し、イメージをより体感・認識できるようインスタレーションで夜や黄泉の世界を表現する。

写真のイメージは闇を意識的に作り出し、死を暗示する。

それぞれの写真は精神世界を表すためミニマリズムを徹底し、生と死は混在させず死だけに目を向けた画面で構成。

死後の世界である三途の川を想起させる写真は日本人であるアイデンティティでもあり、自身の死生観を含めた写真群で構成。



インスタレーション用写真



坂東 正沙子 (ばんどう まさこ)

略歴

大阪府寝屋川市在住

写真家

岡山大学環境理工学部 中退

個展・グループ展

2008年 個展「sublimate」galleria-punto (岡山)

2009年 グループ展「同時代展」同時代ギャラリー (京都)

2019年 YOSHITOMI PHOTO FESTIVAL (京都)

web サイト

<http://masakobando.com/>

関連イベント「Bar」

開催日時：会期中毎日 18:30～20:00

内容：

在廊日は全日 18:30 よりバーとして作家が皆様をおもてなし致します。

無料ですのでおひとり様でも是非気軽にお越しください。

展覧会を機に皆様の交流会となるよう企画致します

お問い合わせ先

坂東正沙子写真展「月讀」に関するご質問、メディア掲載用画像の提供等のお問い合わせは、下記までお願い致します。

gallery 176 (ギャラリー イナロク)

担当：坂東正沙子

tel : 050-7119-9176 | e-mail : info@176.photos